

## 第8回ファイルドワーク 新羅神を若狭・近江で探る

令和2年11月27日、神社の成立における新羅神の影響を調査するため、福井県敦賀市の氣比神宮と滋賀県大津市の園城寺(三井寺)を訪れた。氣比神宮の元々の祭神は「敦賀」の地名の由来となった渡来神の都怒我阿羅斯等であり、天智・天武両帝と縁の深い三井寺の境内には新羅明神が祀られている。

『日本書紀』には、「素戔嗚尊は息子五十猛命と共に、まず、新羅の曾戸茂梨に天下ってから、埴船で海を渡って出雲に着いた」とあるように、長門や出雲や若狭といった日本海に面した地方における神話で「海の間」から渡来した神」という言説は、すなわち「朝鮮半島(およびその先にある中国大陸)から渡来した」というふうに理解するのが一番自然である。ただし、古代以来「国家」というものは存在したが、「国民」という概念は近代国民国家の所産であり、人々は「国境」を越えて自由に行き来しており、弥生時代後期から古墳時代にかけて、朝鮮半島南部にも多くの「倭人」や「越人」が居住していたことは言うまでもない。

重要文化財に指定された朱塗りの大鳥



都怒我阿羅斯等が降り立ったと伝えられる氣比宮古殿地「土公」

居が参詣者を迎え入れる氣比神宮は、古来、朝廷からの崇敬も篤く、式内社(明神大社)、越前国一之宮であり、近代社格制度下においても官幣大社に列せられる立派な神社であり、『古事記』においては「氣比大神」、「日本書紀」においては「筭飯大神」と称せられていることから、「食」の「靈」すなわち「食物神」であると解釈されている。氣比神宮自身の説明では、祭神は、伊弉沙別命・仲哀天皇・神功皇后・応神天皇・日本武尊・玉姫命・武内宿禰命の7柱となっているが、多くの神社が明治の「皇国史観」という宗教政策によって祭神が変更されているので、学術的にはそれを鵜呑みにする訳にはいかない。実際に氣比神宮へ参拝してみると、立派な本殿とはかなり離れた境内地の東端に、都怒我阿羅斯等を祀る「角鹿神社」という摂社がひっそりと鎮まっている。また、境内の北東の外れに、現在は敦賀小学校の校庭になっているが、「氣比宮古殿地」として、阿羅斯等が最初に降り立ったと伝えられる直径数メートルの「土公」と呼ばれる小山があり、その背後には、天筒山と呼ばれる神奈備山がある。

『日本書紀』によると、「崇神天皇の時、大加羅国(伽耶・新羅)の王子で額に角の生えた都怒我阿羅斯等が来朝し、日本海岸沿いに船で穴門(長門)から出雲を経て筭飯浦(敦賀湾)に到着した」とある。また、「阿羅斯等はある女性を追ってきたのであるが、その女性は、摂津国の難波や豊後国の国前(国東)郡の比売語曾社の神になった」とある。よく似た内容の話が『古事記』では、「新羅国の王子天之日矛(天日槍)と阿加流比売神の話」として収録されており、いずれにしても、この越前・敦賀の地に、古代以来、多くの朝鮮半島出身者が渡来してきたことは間違いない。

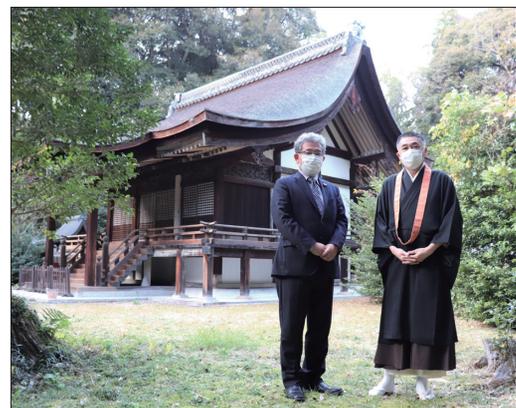
敦賀から一山越えて南下すれば、そこはもう水運に便利な広大な琵琶湖が広がる近江国であり、南端の大津で上陸すれば、「王城の地」山城・大和・摂津はもうすぐ先である。湖西地方には、「和邇」や「蓬萊」といったいかにも渡来人由来の地名や「安曇」や「志賀」といった海神「和多都美」を祖とする海部族に由来する地名が残っている。湖上の鳥居で有名な高島市の白鬚神社も、背後には新羅式の古墳があり、おそらく、元は渡来人の祖廟であった「新羅神社」だったと思われる。

大海人皇子(天武天皇)は、壬申の乱で滅ぼした甥の友皇子(贈弘文天皇)への滅罪のため、兄弟天智天皇の近江宮(大津京)の故地に勅願寺として園城寺を創建した。一般にこの寺が三井寺と称せられるのは、天智・天武・持統三帝が産湯に使ったと呼ばれる「御井」があるからだろうである。園城寺に着くと、第164代長吏(住職)の福家俊彦先生が迎えに来てくださり、大津京遷都よりもずっと以前から琵琶湖周辺を拠点にしていた新羅系の帰化人たちの歴史や園城寺開山の経緯、壬申の乱、修験と天台教学を納め遣唐使帰国後この寺の長吏となった智証大師円珍の話、当時の東アジアの国際情勢等についていろいろとお話を伺った後、福家先生自ら飛び地境内に鎮座する新羅善神堂(新羅明神)を案内していただいた。

大津市役所のすぐ裏手にあるにもかかわらず、弘文天皇陵の背後のほとんど人の境内には、神気が充ち満ちている。河内源氏の2代目棟梁である源頼義の三男源義光は、この新羅明神の前で元服したので「新羅三郎」と呼ばれた。長兄は、後三年の役で活躍し、源氏の東国進出の礎を築いた源義家(八幡太郎)、次兄は源義綱(賀茂次郎)である。源氏の血を引く足利尊氏が、南北朝の争乱の中で憤死させてしまうことになった後醍醐天皇への滅罪のために寄進したのが現在の社殿であり、この新羅明神は石清水八幡宮と共に長年、武家からの篤い信仰を集めた。

この社殿も、明治の神仏判然令で取り壊されそうになったが、幸い「神像があったので、「新羅善神堂」という仏堂である」ということになって取り壊しの難を免れた。明治の宗教政策がいかに神道の伝統を歪めてしまったのかという点を考慮して、神道国際学会ではこれからも「神社本来の姿」を探ってゆきたい。

〔リポート 三宅善信〕



福家俊彦園城寺長吏の案内で、新羅善神堂の禁足地で新羅明神の説明を受ける

# 第24回国際神道セミナー 『神々と伝染病』開催

令和2年9月13日、キャンパスプラザ京都において、第24回国際神道セミナー『神々と伝染病』が開催された。新型コロナウイルス感染症の第二波が猛威を揮う中での開催であり、3密を避けるため実際に会場に集まったのは、講師・パネリスト・本会役員・取材関係者と中継スタッフのみで、それ以外はZoom方式によるリモート参加となったが、海外ともインターネットを通じてディスカッションが繰り広げられるなど、その内容だけでなくその方法も含めて「ウィズコロナの時代」に相応しい国際セミナーとなった。



セミナー会場の様子

## 祇園祭の本質

本会を代表して理事のアレクサンダー・ベネット関西大学教授による開会挨拶に続き、「疫病除けの神」として知られる八坂神社の野村明義禰宜が「祇園祭の本質」と題して次のように講演した。

「祇園祭」として知られる八坂神社の祭礼は、かつては「祇園御霊会」と呼ばれ、その起源は、全国各地で疫病が流行した貞観11年（869年）に都の神泉苑に当時の国数にちなんで66本の矛を立てて疫病の終息を願ったことに始まる。伝承によると、神仏習合時代の祇園社の祭神であった牛頭天王が、南海の龍神のもとへ嫁取りに行く道中で日が暮れた際、貧しい生活にもかかわらず親切にも一夜の宿を提供してくれた蘇民将来に、そのお礼として「蘇民将来之子孫也」と書かれた茅の輪を身につければ、疫病から逃れられると約束したことに端を発する。



講師 野村明義氏

その意味で、本来、疫病除けの祭事であった祇園祭のハイライトである山鉦巡行が、今般のコロナ禍で簡略化されたのは断腸の思いである。しかし、千百五十一年の歴史を有する祇園祭は、その時代その時代によって形式や内容が変遷してきた祭でもある。それらの長年の経緯を経て、祇園祭が有していた本来の意味が判らなくなった。その変貌とは、①風水によって「見えない境界」で守られていた平安京の形状崩壊、②応仁の乱による祭の中断と山鉦の焼失、③明治の神仏判然令による祭神・社名・祭礼名の変更、④廃仏毀釈による「祇園」信仰の封印、⑤「龍穴」信仰の封印、⑥陰暦からグレゴリオ暦への改暦による「水無月満月祭祀」の封印、⑦交通・観光優先による祭礼の変貌等であるとして、もう一度、祇園祭の本来の姿を取り戻して、新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックを水と大気の力によって浄化しなければならぬと論じた。

野村禰宜の発題に対して、オンラインで参加したカリフォルニア大学サンタバーバラ校のフアビオ・ランベッリ教授は、

疫病除けの祭である祇園祭の山鉦巡行が新型コロナウイルス感染症で中止になったことにはショックを受けた。アメリカでは宗教と感染症の葛藤が見られ、ほとんどの教団は世俗的な当局の指示に従って礼拝施設を閉鎖しているが、反知性主義を標榜する一部の原理主義教団が科学的医学的知見を挑発して布教活動を続けて、宗教が感染症を治すどころか感染症クラスターの原因になっている。しかし、このことは宗教が有する両義性や宗教に内在する本質に迫るものであり、今の世の中が求める宗教とは、いったいどちらの宗教であるのか？

また、キリスト教徒には「終末観」というものが強く意識されるが、神道にはそういう思想がないことが、日本人のビヘイビアに影響を与えているのでは？ という疑問がもたらされたコメントした。

## 祭儀・風習にこめられた人々の祈り

続いて、大阪大学大学院言語文化研究科の永原順子講師が「水の中の異界／祭儀・風習にこめられた人々の祈り」と題して次のように講演した。

永原氏は、「見えないものを見る力」という視点から、人々が「わけの

解らないもの」、「怪しいもの」に出くわした際にどのような振る舞いをするかということについて、今回のコロナ禍で一世を風靡した感のある「アマビエ」や最もポピュラーな水辺の妖怪である「河童」を例に、海や川にまつわる怪異や風俗を紹介し、水を異界として敬い恐れる日本人の自然観について言及した。

人間の暮らす陸地（現世）と水中（異界）を対比して、海や川からは神々や新しい技術がやって来たり、洪水や津波といったさまざまな災いもたらされる一方で、こちらから新世界を求めて渡ったり、罪穢れを祓つたり流したりする「両義性」があると指摘した。



オンラインで参加するランベッリ教授



講師 永原順子氏

『浦島太郎』といった伝承から、ジブリ作品の『千と千尋の神隠し』や『崖の上のポニョ』における水の描写や、新海誠作品の『天気の子』といったアニメ作品の創作を例に挙げ、この世とあの世を分かち存在としての「水」について言及した後、災害などの現実の残酷さと犠牲者や被災者といった当事者と世間一般との意識の乖離がもたらす「救い」の難しさを指摘し、「水が持つ恐ろしい面について宗教者はどう考えるか」また「コロナ禍がもたらした社会の変化は、人々の神々に対する接し方をどう変えたか」等について問題提起した。

永原講師の発題に対して、オンラインで参加していた秩父今宮神社の塩谷崇之宮司は、各地の神社の縁起において、「何か災いが起こると神様が祀られる」というパターンがある。秩父今宮神社の場合、奈良時代に悪獣毒蛇が蔓延<sup>はび</sup>つて苦しむ村人を助けるため役行者が八大龍王を祀って災いを収め、室町時代に秩父で疫病が流行した際、京都の今宮神社から素戔嗚尊を勧請して鎮めたという歴史がある。水には「難を祓う」、「汚れを浄化する」という作用と共に

「潤しを与える」、「恵みをもたらす」という2つの作用があり、日本人は水によるこれらの働きがなされていけない状態を「気が枯れる」すなわち「穢<sup>けが</sup>れ」と呼んだが、水がこれらの力を発揮するためには、澱んだ水ではダメで、流れている、動いている水であることが必ずであるが、それがより激烈化する「暴れる水」となってしまう。その作用への恐れも加えた「浄化」「湿潤」「恐れ」の3つの作用への信仰が形成されたとコメントした。

### 国難と宗教

#### 『宗教が宗教であるために』

続いて、東京工業大学大学院の弓山達也教授が『国難と宗教』宗教が宗教であるために』と題して、次のように講演した。

弓山教授は、菅義偉官房長官（当時）、小池百合子都知事、吉村洋文府知事らの言葉を取り上げて、日頃は決して「宗教」についてはコメントを発しない日本の政治家たちが、「新型コロナウイルス感染症の蔓延を防ぐため、お盆の帰省は自粛しよう」と揃って提唱したことへの違和感と、それに対して既成の宗派教団が何も反論しなかったという事実から、今回のセミナーにおける課題「国難と宗教」について考えるきっかけを得た。お盆には、業者による「墓参り代行」や寺院による「オンライン参拝」がメディアでも

てはやされたが、そのことに対する「居心地の悪さ」を感じた人も多かったはずである。日本における「国難と宗教」について考える際、まず、ちょうど百年前（1908〜20年）に全世界で四千万人のいのち奪った「スペイン風邪」に対する日本社会の対応について、当時の新聞記事が引用しつつ、連日犠牲者数が事細かに報道され、また、手洗いやマスクの着用の励行、行楽等の大勢の出入に対する注意、学校の休校など、現在とほとんど変わらなかったことが紹介された。ただ、ひとつだけ異なっていたのは、大勢の出入があったものの初詣・節分・お盆などの宗教行事については、まったく制限がなされていなかったこと。そのことから、当時の日本人にとっては、スペイン風邪という「死の恐怖」と宗教行事という「死を見つめる文化」とはまったく競合していなかったということが判明した。

弓山教授は、これらの仮説を証明するため、東日本大震災の大津波で多くの犠牲者を出した福島県いわき市における「じやんがら念仏踊り」を例に取り上げた。大勢の仲間の死という極



講師 弓山達也氏

限状態を経験したことによって、無念の死を遂げた者を供養するためにプロの僧侶による「供養」ではなく、それまで衰退の一途を辿っていた「じやんがら念仏踊り」をその手段として若者たちによって復興させられた。国難にあつて、「じやんがら念仏踊り」が、①意味の源泉となり、②見えないものを可視化し、③生と死をつなぐ役割を担うようになったと分析した。

百年前のスペイン風邪や十年前の東日本大震災や今回の新型コロナウイルスのパンデミックなどを通して、宗教本来の役割を宗教（家・団体・研究者）が確認し、自らの言葉で発信することが重要であると述べた。

弓山教授の発題に対して、ノルウェイからオンラインで参加していたオスロ大学のマーク・テューエン教授は、前近代において疫病封じは宗教の任務のひとつであったが、近代社会において宗教の守備範囲は狭められ、疫病に対して宗教側から何か発言することはむしろネガティブに捉えられるようになった。しかし、現代人は「宗教は疫病に効かない」ということを知りながら、なおマスクをしてでも宗教行事に参加したくなるという信条はまさに、弓山教授の指摘するとおりである。「こういう時期だからこそ祇園祭が必要だ」という声も出てきて当然である。だからこそ「行為に対



モデレータを務める 三宅善信理事長

する意味づけ」が必要なのであるとコメントした。

### パネルディスカッション

3人の基調発題と、オンラインで参加した3人のコメントから問題提起を受けて、伝染病と宗教の関係についての著作もある三宅善信理事長がモデレータとなってパネルディスカッションが行われた。

パネリスト同士のディスカッションに先立ち、この日のセミナーをオンラインで聴講していた上賀茂神社の乾光孝権禰宜、野宮神社の懸野直樹宮司、創価大学の中野毅名誉教授や、会場であるキャンパスプラザ京都の人数制限ギリギリの中で来場された関西大学の水野友晴准教授らから、3人の基調講演者に質問が寄せられた。

また、三宅理事長は、野村禰宜の「神泉苑で矛66基を立て」とか「多くの山鉾が都を巡行」という話には「日本人にとっては数が多いということ自体が価値なの

ではないか？」と、永原講師には、「仏教でもキリスト教でも、地獄との境界線には川が流れており、これを『渡る』という決意に意味を見出しているが、神道では祓戸四神に任せるように、受動的なのは？」と、弓山教授には、「自然災害には素早く対応できる日本人が、戦争や経済危機やパンデミックなどの人災には巧く対応できない訳は、『今が最悪の事態だ』という最悪認定をする者がいないからでは？」などと次々と質問を投げかけ、ディスカッションは大いに盛り上がった。

最後に、常任理事の芳村正徳神智教教主による閉会挨拶を行い、この日の第24回国際神道セミナー『神々と伝染病』が終了した。



セミナーはインターネットで同時中継された

## 『世界中の人々が羨むほどの輝きを取り戻すために』

金光教春日丘教会長/榊レルネット代表 三宅善信

平成の御代は、「天安門事件」と「ベルリンの壁崩壊」という社会主義体制下で長年抑圧されてきた民衆の自由を求めようねりによって幕開け、東欧各国にドミノ倒しのように広がったその流れは、一挙にソビエト連邦の解体という第二次世界大戦後の世界を規定してきた米ソ両超大国による冷戦構造を終わらせた。冷戦期間中は「金の卵を産む鶏」である日本を自分たちの側に留め置くために「甘い顔」をしていたアメリカは、「宿敵」ソ連が居なくなったので、日本への苛斂誅求を容赦なく始めた。これが「バブル経済の崩壊」の原因であり、アメリカが強いたグローバル新自由主義経済体制に組み込まれた日本は、その後「失われた30年」という日陰の道を歩まされることになった。

一方、一瞬生じた世界秩序の空白を突いて頭角を現してきたのが、各地のイスラム原理主義勢力である。このことは、21世紀というもうひとつの「新しい時代」の劈頭に起きた「9.11同時多発テロ」に象徴される。メンツを潰されて激怒したアメリカが中東地域で「非対称戦争」という極めて効率の悪いモグラ叩きをしている間に台頭してきたのが中国である。非効率な社会主義経済国家であったかつてのソ連は、軍事力

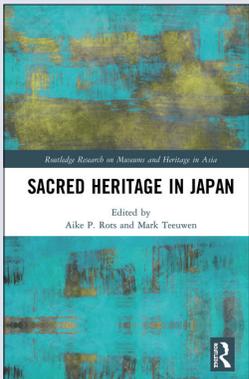
以外に取り立てて見るべきものはなかったが、市場経済を取り入れた全体主義国家の中国の脅威はソ連の比ではない。

そのような世界情勢の中で、日本は令和の御代を迎えたのである。「人のいのちが軽い」全体主義国家である中国は、「人のいのちが重い」民主主義国家の弱点を突く形で、新型コロナウイルス感染症を全世界に拡散させ、「唯一の超大国」となったはずの米国がまんまとその罠にひっかかり、すでに30万人を超す合衆国市民が犠牲となった。現在でも一日25万人ずつ新規感染者が増えているので、下手をすれば第二次世界大戦時におけるアメリカの将兵の犠牲者数42万人を超し、100年前の「スペイン風邪」のパンデミック時や160年前の「南北戦争」による犠牲者数50万人を超す、合衆国史上最悪の事態になるかもしれない。

欧米先進諸国はいうに及ばず、中東アラブ諸国からアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国に至るまで、COVID-19のパンデミックによって呻吟する中で、全体主義国家中国のみがその覇権を拡張してゆくのを欧米諸国が指をくわえて見ているだけではないことは明らかである。80

年前の日本がそうされたように、アメリカはこれを全力で叩きにくるであろう。米国の政権がトランプからバイデンに代わっても、「自分の地位を脅かす2位の国を叩く」というアメリカ政治の基本は変わっていないからである。そのためには、かつてソ連と対抗するため、日本を自分の手元に惹き付けておく必要上、日本に高度経済成長という甘い汁を吸わせたように、中国の野望を叩き潰すまでは、トランプ政権がそうであったようにバイデン政権においても、アメリカの対日政策は比較的甘いものとなるであろう。

日本はこの好機を利用して、「失われた30年」で失ったあらゆるものを取り戻さなければならぬ。幸い、日本における新型コロナウイルスの被害は、欧米諸国と比べると遙かに軽症である。そのためには、国政においては、第二次大戦後、経済成長を優先するために「目を瞑って」きた自主憲法の制定をはじめとする「普通の国家」としてのあらゆる制度を早急に建て直し、国民各位においては、あらためて正直・清潔・質素・勤勉という日本の伝統的価値観を大切に、世界中の人々が羨む文化国家としての輝きを取り戻すために、日本国民が一致団結して取り組むべき時である。



## 書籍 [Sacred Heritage in Japan (日本の聖なる文化遺産)]

Aike P. Rots &amp; Mark Teeuwen 編、Routledge, 2020

宗教と文化遺産の間 はざま

宗教と文化遺産が同じ場所でぶつかり合うことが多い。明治30年の古社寺保存法から、平成27年の日本遺産制に至るまで、国宝・文化財・遺産として認定された件のなかに宗教的性格を帯びたものが大きな割合を占めている。ユネスコの世界遺産と無形文化遺産にしても同じことが言える。世界遺産に指定された宗教的な場所として、奈良や京都のお寺や神社、熊野古道、長崎と天草のキリシタン遺跡と教会、「聖なる」沖ノ島と宗像神社などがある。無形文化遺産にも、お祭りの山・鉦・屋台行事から神楽や田楽まで、宗教色の濃いものが多々存在する。

これはもちろん、日本に限った現象ではない。世界的に、大聖堂、モスク、寺院など、宗教施設が文化遺産として国家や地方政府の保護の対象になることが多い。それにしても、「宗教」が「文化」として扱われるときに起こるはずの矛盾について、研究が意外に少ない。

お寺、神社、お祭りの価値は、何だろう。遺産として考えるとき、歴史的・美術的な価値が強調される。文化財に指定された寺社は、「日本文化」の象徴になる。指定の背景には、経済的動機も常に見え隠れする。文化財・世界遺産になると観光客が増え、町興しの効果が期待される。場合によっては、文化的、経済的な価値に基づいた経営方針が、寺社の「宗教」の場としての価値を損ねてしまう危険性も大いにある。

日本の政教分離制度のもとで、宗教的性格をもった文化財・遺産を公金で保護することは容易ではない。憲法上、宗教的な側面を「ストーリー」から

外しながら、世俗的な価値を強調する必要がある。または、宗教的な面を民俗信仰と言い換えることによって、制度的な「宗教」と区別する戦略も近年目立つようになった。ここに、日本独特の問題点が多くあり、世界的にも「宗教の遺産化」に関する研究の参考になるとと思われる。

この本は以下の9章からなっている。

1. 日本における遺産作りと宗教 (Mark Teeuwen & Aike P. Rots)
2. 世界遺産の政治 — 百舌鳥古市古墳群を例に (Tze M. Loo)
3. 多国間遺産政治と日本 (Herdis Hølleland)
4. 世界遺産と女人禁制 — 熊野古道と沖ノ島の件 (Lindsey E. DeWitt)
5. 斎場御嶽—世界遺産は、だれのもの? (Aike P. Rots)
6. ユネスコ無形文化遺産になるということ — 奥能登のアエノコト (菊池暁)
7. 京都祇園祭の山鉦巡行—文化・宗教・信仰の間 (Mark Teeuwen)
8. 地方寺院と生き残りの伝統 — 過疎化の中の文化財 (Paulina Kolata)
9. 四国遍路をめぐる世界遺産戦略 (Ian Reader)

マーク・テーウェン(オスロ大学教授)





## 話題のこの人

### 神道を普遍的な文脈で再構築する

# 加藤 大志

服部天神宮 権禰宣

日本の大学で学ばれ、さらに神職の資格を取得された後、ロンドン大学のSOAS(東洋アフリカ研究学院)へ留学されたそうですが、その目的はどのようなことだったのでしょうか？

自分が培ってきた神道観を日本という土地ではなく、普遍的な文脈で再構築する必要があると思っただけです。神道は思想的なバックグラウンドが弱く、日本という土地で、日本人の感性によって無意識的に共有されながら発展してきた歴史の経緯があるので、どうしても普遍的な視点から語れないと強く感じていました。そこで、英国に留学し、自分の神道観を一度まっさらにして学び直すために、ロンドンの大学院で神道を研究することに決めました。

## SOAS留学で得たことはどのようなものですか？

神道の普遍的な文脈における言語化が必要だと感じました。神道について積極的に発信することで、文化的背景の違いによる課題が浮かび上がってきました。日本の文化的背景による「罪」「赦え」といった言葉を欧州における考え方に基づいて説明することが、結果として、客観性を欠いた視点による説明に繋がってしまいます。一方で、安易に「罪」「英語罪を犯す」といったキリスト教の神学用語を用いて説明することは、キリスト教の歴史的背景から理解されてしまうことになってしまったため、適切ではありません。まずは、文化的背景の違いを理解した上で、普遍的な言葉に置

き換えて言語化することが大切であると学びました。

『Shinto Moments』という本を刊行されましたが、神道について英語で発信する意義は、どのようなことなのでしょう？ また、その反響はいかがでしたか？

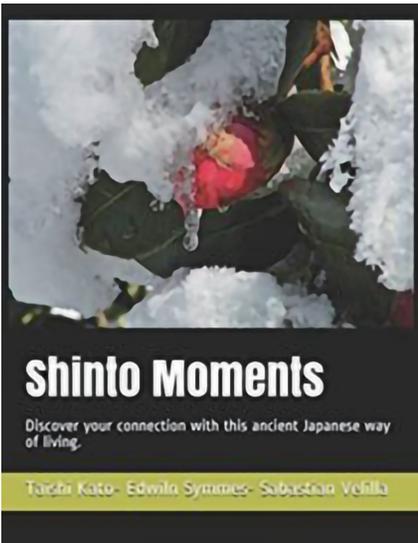
日本や日本人という固定観念に縛られず、神道を普遍的な文脈で再構築するきっかけになればと思います。『Shinto Moments』を出版いたしました。

神社には、人為的所産として構築された宗教的象徴である聖画や偶像はありません。つまり、何か目に見える対象物に対して祈りを捧げるという慣習は昔からありませんでした。その点に関しては、いわゆる「宗教」とは大きな違いでしょう。では、なぜ祈りの対象である偶像が必要なのかというと、心の目を養うことが大切だからではないでしょうか。ギリシャ生まれの日本研究家であるラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、神道を書物からではなく、日本人の生活空間から感じることができると表現しています。とで、日本人的な宗教観の魅力に迫りました。ハーンは、神道のカミを次のように表現しています。「この大気そのものの中に何かがある：うっすらと霞む山並みや怪しく青い湖面に降りそそぐ明るく澄んだ光の中に、何か神々しいもの感じられる：これが神道の感覚というもののだろうか」と。

ハーンは、自然現象から感じとられる「何かがある」感覚こそが「神道の感覚」といいます。西洋人のハーンも頭で理性的に理解するのではなく、感性を持って感じとられる神道を取り扱ったのです。このように、土地や民族に縛られない神道を英語で伝えることこそ、今回『Shinto Moments』を出版した大きな意義です。『Shinto Moments』の出版に対する興味深い事実として、もともと「神道」に関心がある方だけではなく、「自然との共生」を生活で大切にされている方からも大きな反響があったことです。西欧では、人間的倫理規範を大事にする「伝統宗教」を離れ、人間だけでなく自然、動物、植物のいのちを愛でることを大事にする層が拡大しています。そういった方々に「神道」とはという説明ではなく、日常生活を切り取った普遍的な感性を伝えたことによって、共感が得られたのではないかと推察しております。

## 「神主さんに学ぶ」というオンライン講座をされていますが、対象や目的について教えてください。

今回のコロナ禍の影響から、家で実施できる習慣や実践について、多くの方からお問い合わせをいただきました。神社に参拝が叶わない状況において、家で過ごす時間に少しでも豊かな生活を送ってほしいという想いのもとオンライン講座を実施しました。ありが



「Shinto Moments」書影

たいことに、日本だけでなく世界中の人々に参加いただきました。難しい行ではなく、日常で当たり前に行なっていることを「ゆっくり、ていねいに」自分自身の心と対話しながら行うことを話しました。日常生活においてできる「神道習慣」を日々磨いていくことも今後は必要だと痛感しました。

## 今後のご活動の展望や、今、社会に伝えたいことを教えてください。

「足し算」ではなく、「引き算」することで、神道にすでにある魅力を生かしていきたいと思っております。神道には、人間を「マインドフルネス」な状態に導く要素があると思っております。しかし、あらゆるものを「足し算」することで複雑化してしまっている神道や神社を「引き算」することで、もっと大事な要素を見出したいと思えます。具体的には、『Shinto Moments』で示した内容を、シンプルに感じられる要素「音」や「動き」に落とし込んで、人の感性を豊かにする手助けがしたいと考えています。

## 時代に求められるオンライン化

コロナウイルスを封じ込める挑戦が続く中、各種イベントのオンライン化が求められている。この時代の要請に応じて、本会でも昨年よりオンライン化を急速に進めてきた。

9月13日に京都市で開催した第24回国際神道セミナーは、厳しい入場制限や海外からの渡航制限により会場に会場できない聴講者や研究者のために、オンライン中継を行い、日本や海外の各地からセミナーに参加してもらった。さらに、当日の録画映像はYouTubeにて公開し、いつでもどこからでも視聴できるようにしている。これに対し、各方面から反響をいただいております。



11月12日に開催されたオンライン理事会



YouTubeで公開中の国際神道セミナー

際日本文化研究センターのジョン・ブリーン教授は「非常に良い、時宜を得たセミナーだ」と評された。また、通常は参加理事が机を囲んで開催している理事会も、今年はオンラインでの開催となり、国内各地の理事はもとより、欧州在住の理事も参加することができた。

様々なイベントのオンライン化により、感染症対策として長距離移動や密状態を避けることが可能になるだけではなく、公務など多くの仕事を抱えながら研究活動をする研究者や理事の参加のしやすさにもつながることが実感された。本会は、今年もイベントのオンライン化を進めていく計画である。

## 第25回国際神道セミナーのご案内

令和3年3月9日(火)、東京都千代田区の関西大学東京センター(東京駅隣接)において、第25回国際神道セミナーを開催します。テーマは、昨秋の京都での第24回国際神道セミナーに続き、『神々と伝染病II』です。昨年9月のセミナーでは、長い歴史の中で私たち日本人がいかに

伝染病と向き合ってきたかを学びました。まだまだ終わらぬコロナとの闘いに、先人の智慧をどう活かしているのか、内外の研究者等とともに考えていきたいと思えます。同封のご案内をご参照の上、ぜひご聴講ください。会場での聴講およびオンライン中継を予定しております。



## 神社巡り⑮

三宅善信

神道国際学会理事長

### いざなぎじんぐう 伊弉諾神宮

● 兵庫県淡路市多賀740

古事記によると、この国はイザナギとイザナミの両神が天浮橋から天沼矛で渾沌とした海上をかき混ぜたところ、矛から滴り落ちたものが積もって淤能碁呂島となり、その島に降り立って、天之御柱と八尋殿を建てて結婚し、男女の交わりによって淡路島・四国・隠岐島・筑紫島(九州)・壹岐島・対馬・佐渡島・大倭豊秋津島(本州)の大八洲とその周辺の島々を生んだことになっている。このことから判ることは、はるか大昔からこの国の人々は、この国の人々の暮らす日本列島の全容を知っていたということである。

まず、伊弉諾神宮が鎮座する「多賀」という地名に注目したい。古事記の真福寺本にイザナギの幽宮(=終焉の地)として「故其伊耶那岐大神者坐淡海之多賀也」とあることから、「淡海」を「近江」と解釈して、近江国(滋賀県)の多賀大社であるという説もあるが、多賀大社の鎮座する滋賀県犬上郡多賀町は、新羅より渡来した犬上氏の勢力下にあったので、私はその説を採らない。『古事記』では「近江」は「近淡海」と表記するのが常で、同じ『古事記』でも真福寺本以外の写本にある「故其伊耶那岐大神者坐淡路之多賀也」を採って、淡路島の多賀、すなわち伊弉諾神宮説を採りたい。何よりも、島々を生んだ神が

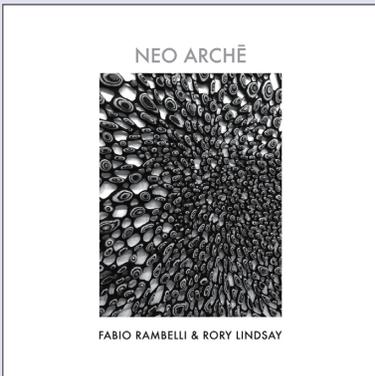
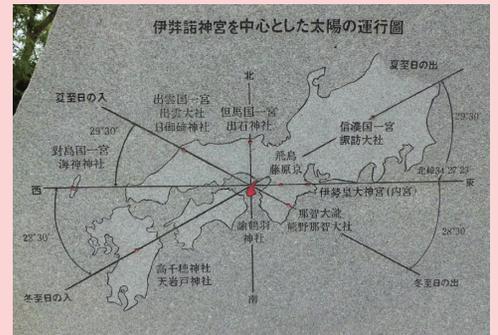
最初に創った淡路島に鎮座するほうが自然である。



数年前、筆者が正式参拝させていただいた折、本名孝至宮司から伊弉諾神宮についての説明を受け、天之御柱を祀った本殿で玉串奉奠をさせていただいたが、洒掃のゆきとどいた境内で見つけた『伊弉諾神宮と中心とした太陽の運行図』と題する、いわゆる「レイライン(太陽の道)」説を表示した石碑が気になった。以前から、飛鳥の藤原京を中心に、東西線上に伊勢の神宮と淡路の伊弉諾神宮が鎮座していることは知っていたが、その線を遙か西方へ延長していくと、朝鮮半島を肉眼で見ることができる対馬の海神神社が鎮座していることに驚いた。神功皇后の三韓征伐に関係するこの神社の本殿は遙か西方の大陸方面を睨んでいることと関連がありそうだ。

さらには、夏至の日の出線上には信濃国の諏

訪大社が、日の入り線上には出雲国の出雲大社が鎮座しており、一方、冬至の日の出線上には熊野那智大社が、日の入り線上には高千穂神社が鎮座しているそうである。近頃流行の「パワースポット」というやつだ。この説の真偽には興味がないが、文化人類学的に言えば、南方の海洋文化と極めて親和性が高い日本人の古代文化において、航海のための天体観測技術は必須の条件であり、そのことと神々を祀る信仰心とは不可分な関係を有する。後に「稲作文明」によって上書きされてしまい、その「本来の姿」が失われてしまった神社が多い中で、この伊弉諾神宮が果たすべき役割は大きい。幸い本名宮司は産経新聞に『神々からの伝言』と題して8年半、通算400回を超える連載を行ない、英文による海外発信にも熱心なので、今後の展開を大いに期待したい。



## CD [Neo Archē]

ファビオ・ランベッリ 笙 / ロリー・リンジー 楽琵琶

Bandcamp、2020年9月発売、\$ 7(約700円)

私、ファビオ・ランベッリは、学生時代から雅楽に興味を持っています。その不思議でなんととも言えないメロディーや音の融合は、別の世界の音楽のようなもので、とても魅力的です。

しかし、私の雅楽への興味は、いわゆる古典の雅楽(管弦、舞楽、歌物)だけではなく、笙のための現代音楽レパートリーに及びます。例えば、ジョン・ケージ、一柳慧、細川俊夫、アラン・ホヴハネスという作曲家の笙の新しい作品を勉強してきました。私自身、簡単な作品も作曲中です。私はもともと、様々な音楽環境(ジャズ、ロック、プログレ、フリージャズなど)で、サクソフーンやフルートなどをやってきました。これらの音楽要素はすべて、このCDの笙の演奏に影響を与えたと思います。

ロリー・リンジー氏はカリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)宗教学研究科の客員研究員で、ハーバード大学のチベット仏教研究の博士号を有する優れた若手研究者です。同時に、素晴らしい音楽家でもあります。若いときからギター及びインドや中近東の様々な弦楽器に造詣が深く、私が指導するUCSBの雅楽プロジェクトに参加し、楽琵琶を発見し一目惚れしました。ロリーの琵琶へのアプローチはユニークで、雅楽の伝統的な奏法やスタイルのほか、琵琶の「親戚」と言える楽器であるウードやタンブールの奏法を取り入れて、独特な音を作り出そうとします。

ロリーと一緒に2人で練習して、即興をたっぷり使って自分たちのサウンドや作品を作り始めました。コロナウィルスの流行のせいでロックダウン状態ですが、Facetime(ビデオ通話アプリ)を利用して互いの演奏を聴きながら、自分の楽器の演奏をそれぞれ録音して、ロリーがプロデュースしました。

このCDでは、今の状況に合った癒しをもたらしながら、昔からの楽器を活かして新しい可能性を引き出すようなサウンドを目指しています。ネオ・アルケーというタイトルは、古代ギリシャ語で「新しい原理、新しい始まり」という意味で、過去を意識しながら未来へ向かうべき、という気持ちを表しています。その中で、雅楽のチューニング、調子の音などを取り入れながらも、アンビエント、ミニマル、現代音楽の影響を受けて、即興をしています。ちょっとした実験もしてみました。それは、特に太食調(雅楽の六調子のひとつ)の変奏で、その調子の中近東での起源とその秘した可能性を探ってみました。

今は、新しいCDを制作中です。いずれ、日本で演奏するのが夢です。多くの方々に私たちの音楽を楽しんでいただけると、大変嬉しいです。





# 御嶽神社

マイケル・パイ(マールブルク大学名誉教授)

御嶽神社は、木曾御嶽山(3067m)の山頂に鎮座する小さな神社です。神社の前に立ち反対側を向けば、東から昇るご来光を拝むことができます。著者である私は、幸運なことに1994年、妻と英国からの学生2人と共に、御嶽山に登ることができました。好天に恵まれ、私たちは素晴らしい景色を楽しんだのです。登山道上、火山の開口部からガスが噴き出すところを通り過ぎました。私はしばしばこの時のことを思い出し、そして、その20年後の2014年に噴火でいのちを失った犠牲者たちのことを思い、悲しい気持ちになります。私たちが一夜を過ごした小さな山小屋は、この噴火によって滅茶苦茶に破壊されてしまいました。しかし、多くの関係者が、緊急時用シェルターの設置や山小屋の補強・再建など、安全対策と復興への努力を続けてきました。2020年秋の時点で、頂上付近は未だ立ち入り禁止ではあるものの、ロープウェイも運行し、多くの人々が美しい御嶽山を再び楽しんでます。

「御嶽山は信仰の登山の霊峰として、富士、立山等とともに古来、参詣者の多い山である。王瀧落合には御嶽神社里宮が鎮座まし、王瀧口の頂上にはご本社が鎮座まします。拝すは縣社王瀧ご本社。(木曾御嶽山頂上)」と記されて

います。頂上にある王瀧口御嶽神社は、信者が登頂の後に拝む最も重要な場所です。右上には「御本社を拝す」という、重要な語句が記されています。

この絵葉書が、神仏分離政策以降の神社のものであるにも関わらず、この中に不動明王のシンボルを見つ

けることができるというのは、興味深いことです。写真の右手前には不動明王が持つ剣の像が立っているのが見えます。不動明王は煩惱を切り捨てるために、この三鈷剣を使うのです。同じシンボルが左隅の丸い「登山記念」スタンプに見られます。このことから、御嶽神社には修験道の信者がしばしば訪れていたことがわかります。通常、修験道では山の頂上で特別な儀式を執り行うのです。それだ



けではなく、単に神社に参拝しご来光を拝む多くの人々も、この危険な山を訪れています。彼らは下山の「パワー」を頂くのです。

※ ご親切にも、この絵葉書について情報を提供してくださった木曾おんたけ観光局に謝意を捧げます。

## 書評

# 鳥と人間の文化誌

奥野卓司 [著]

筑摩書房、2019年4月25日刊、240ページ、ISBN 978-4-480-82380-9、本体2,200円+税

評／三宅 善信 (神道国際学会 理事長)

あらゆる分野で理系と文系の融合の必要性が説かれて久しいが、今、世界を覆う新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、このことの重要性はさらに増しており、その意味でも、まことに時宜を得た出版である。筆者である神道国際学会副会長の奥野卓司教授は、皇嗣となられた秋篠宮殿下が総裁を務められる山階鳥類研究所の所長として、理系の学問と文系の学問の橋渡しの役割を担われている。

神道に関心を持つ人々に「鶏と日本人との関係はいつ頃からあったか?」と訊けば、即座に「天岩戸開き」のエピソードを挙げて、「神代の昔からあった」と答えるであろう。しかし、そのことが明確にするのは、「少なくとも古事記が編纂された8世紀初頭には日本に鶏が居て、夜明けを告げる鳥であるということが人々の間で既に常識になっていた」ということだけであって、「東南アジアで作られた家禽である鶏が神代の昔から日本列島に居た」かどうかということとは別の話である。

このような視点から、誰もが日本芸術の最高到達点の表象として疑わない「花鳥風月」という言葉の指し示す「美しさ」や「心地よさ」に対して、筆者は疑問を投げかける。現代の都市文明においては、カラスやムクドリなどの鳥は、むしろ「不気味な生きもの」というネガティブなイメージのほうが強い。なにしろ、鳥という生物は恐竜の子孫なのだから…。

続いて筆者の関心は、鶴亭(海眼浄光)や伊藤若冲らによって確立された「花鳥画」の世界と、ほぼ同時代に英国で「博物画」というジャンルで活躍したジョン・グルードを比較して、写真が発明されるより以前の「写実画」について、また、浮世絵とトリグラフに共通する版画という手法とともに述べている。

さらに、一般的には「鎖国により、国際性を有していなかった」と考えられがちな江戸時代の日本が、実は、様々な分野において「国際的に開かれて」おり、大名から庶民に至るまで「ペットとしての鳥飼」がブームとなり、クジャクなど外国から取り寄せた珍しい鳥が見世物興行されていたことを紹介している。

次に、文化人類学的な視点から、かつて瀬戸内海で広く行われていたアビ漁とエビス信仰との関係、5,000年前に中央アジアで起こり東西へと拡散していった鷹狩りと武人の関係、また、古代エジプトや中国でも盛んに行われていた鶉飼と日本の鶉飼の関係についても紹介している。

そして、いよいよサイエンスの話になる。鳥類は哺乳類の2倍以上の種があるにもかかわらず、「オーニソロジー(鳥類学)」を専攻する学者の数はとても少ない。しかも、個体数が圧倒的に大きいニワトリやアヒルなどの家禽類は、鳥類学の対象ですらないという不思議と、人類の生存を脅かす鳥インフルエンザをはじめとする感染症についても触れられている。

最後に、AI(人工知能)が、これまで動物固有の機能であったフィードバックを獲得したことによって、自らの行動の結果を再入力して軌道修正を行いながら最適解を求められるようになった現在のテクノロジーが行き着く世界を手塚治虫の『火の鳥』に喩えて論を終えているのが印象的であった。



マイケル・パイ会長

現状では日本へ渡航し研究活動をする事が叶わないため、欧州での活動に力を注いでいる。『Die Religionen Japans』の編集。(2021年前半期にドイツにおいて刊行予定) EASR2021のパネル出席準備。(European Association for the Study of Religionsの年次大会。2021年9月にイタリアのピサ市で開催予定)テーマは『Shinto Online』であり、これは2021年秋に日本で本会が開催する予定の第26回国際神道セミナー『オンライン時代の神道』の英語版となる。

三宅善信理事長

8月27日 関西国連協会の理事長に選出。新型コロナウイルス感染症と社会について講演を行う。

9月11日 オンラインで開催されたUPF国際指導者会議において、日本を代表して『国連創設75周年…宗教者の役割』と題して英語でスピーチを行う。

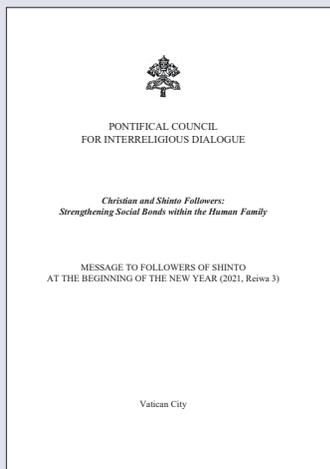
10月11日 オンラインで開催されたWCRP 50周年記念シンポジウム『核兵器のない世界に向けての宗教者の発信』で基調講演を行う。

10月16日 オンラインで開催されたG20諸宗教フォーラムで『雨林と人間生活の関係における神道的視座』と題して英語でスピーチを行う。

教皇庁の新年ご挨拶

今年も、教皇庁諸宗教対話評議会から新年のメッセージを受け取った。

「人類家族の中で社会的きずなを深める神道とキリスト教の信者」と題する書簡の中で、コロナ禍における人類社会の協調の大切さが繰り返し述べられている。英語・日本語の全文は、本会ホームページにて公開中。



芳村正徳常任理事  
11月10日 日本宗教連盟理事として自民党の「予算税制等に関する政策懇談会」に出席  
12月7日 日本宗教連盟理事として文化庁長官と懇談



文化庁長官との懇談

ファビオ・ランベッリ理事

書籍 Defining Shugendō: Critical Studies on Japanese Mountain Religions. (修験道の定義と位置づけを再検討するー日本山岳信仰の批評)ファビオ・ランベッリ、アンドレア・カステイリオーニ、カリナ・ロート編。Bloomsbury, 2020

音楽CD Neo Arche (ファビオ・ランベッリ、笙、ロリー・リンジー・楽琵琶) Bandcamp

新年のご挨拶

マイケル・パイ (神道国際学会会長)

全ての読者の皆様へ、新年のご挨拶を申し上げます。皆様が、心身ともに最高のご健康で、令和3年を始められることを祈念いたします。

もちろん、コロナウイルスについての懸念はありますが、私たちは勇気を失うわけにはいきません。まもなくワクチンが広く供給されるであろうことに希望を持ちましょう。ただし、そうであっても、まだまだ気を付けなくてはなりません。そして、私たちは身体的な弱者や生命の危機に晒されている人々をケアすべきです。同時に、経済的に脆弱な国々も、ワクチンや医療機器を受け取れることが重要です。どの国も、我々の世界の一員なのです。今年には、私たちはみな一息つくことができるでしょうし、私は日本が何とかしてオリンピックを開催できることを願っております。オリンピックを安全に開催するということは重い責任ですが、日本の能力の高さ、優れた技術、そして良い組織がそれを可能にすると私は信じています。わくわくしますね！

神道国際学会は、昨年也非常にアクティブに活動をしました。コロナウイルスの世界的な流行に際して、私たちが電子的な新しい方法で集まれるようになったということは、驚くべきパラドクス(逆説)です。本会のメンバーやスタッフの勇氣、スキルと粘り強さのおかげで、興味深いイベントをいくつも開催することができました。その良い例が、



昨年9月13日に京都市で開催した第24回国際神道セミナー『神々と伝染病』です。今も、YouTubeで視聴することができます。(本会のホームページのYouTubeボタンか、<http://bit.ly/ISSAChannel>からアクセスできます。) また、昨年、国際的な出版物『Exploring Shinto』が出版されたことは大きな喜びでした。この本は、10カ国から寄稿者が集まりました。神道国際学会の支援がなければ、そしてインターネットの時代でなければ、このような国際協力は起こり得なかったでしょう。

今、私たちはみな「日常」に戻りたいと願っています。私自身、そう願っています。外国人である私は、現状では入国の許可が出ませんが、あと数回は日本を訪れたいのです。しかし、「日常に戻る」のは簡単なことではなく、それは「新しい日常」になるのだと思います。皆さんで、「新しい日常」をより良いものにしていきましょう。

神道国際学会の活動をご支援くださる全ての方々に、御礼を申し上げます。この新しい状況下においても、我々は活動計画を進めており、本年も最善を尽くして参ります。どうか、変わらず引き続きご支援くださいますよう、よろしくお願いいたします。

神道国際学会からのお知らせ

◆ ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

- 一般会員(年会費) ..... 5,000円
- 賛助会員(年会費) ..... 30,000円
- 特別賛助会員(年会費) ..... 50,000円
- 法人会員(年会費) ..... 100,000円

特定非営利活動法人 神道国際学会 〒154-0014 東京都世田谷区新町 3-21-3 桜神宮 神習会館内 Tel. 080-7662-0640 / info@shinto.org

編集後記

新年おめでとうございます。皆様は昨年1年間、コロナの流行と向きあう中で、自身の生活や信念について、幾たびも考え直す時間を持ったことでしょう。

本誌2・3面の報告記事の通り、本会も、日本人と疫病について考える機会を提供いたしました。インターネット上でいつでも視聴できるよう、ご用意しております。ご自宅で過ごされる時間も、まだまだ長いことと思えますので、ぜひこの時間に本セミナーを振り返っていただければと存じます。

コロナ禍を越えて、本年がより良き年になるよう、ご祈念申し上げます。